

第18回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「月とトマト」

福岡県立修猷館高等学校三年 瀬口 愛奈



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『月とトマト』

福岡県立修猷館高等学校三年 瀬 □ 愛 奈

運動神経は割と良い方だ。だから、俺はその新鮮なトマトを落とすたくなかったただけなのだ。絶対に。それだけだったのだが、まさかあなるだなんて、予想もしていなかった。

料亭でのバイトの休憩時間。裏部屋にひっこみ、リュックからタッパーと宇宙の写真集を取り出す。タッパーの中には二つのトマト。蓋を外し、ラダムに開いた写真集を隣に置いた。ページには丸い“月”が写っている。

高校三年生、幼少期に両親を交通事故で亡くし、三年前にそれまで面倒を見てくれていた十五歳年上の兄貴を病気で亡くして以来、大学で天文学を学ぶためにこの料亭で働かせてもらって何とか勉強している俺。少しでも節約したいので、昼食はいつもトマトなのだ。

トマトを齧る。じゅくじゅくと音がして、口の中に広がる甘い果汁。その後、柔らかな果肉。安アパートの狭いベランダでも、良い野菜は出来るもんだ。果汁が、顎を伝う。手の甲でそれを拭き取り、齧ったトマトを見ると、鮮やかな赤に、透明感のある果汁。赤い容器いっぱい注がれた聖水のようなそれは、裏部屋の蛍光灯の光を受けてきらめいている。

トマトの美味さに、すぐに一つ目を食べ尽くす。続いて、写真集を覗き込みながらそちらを見ずに、二つ目のトマトに手を伸ばした。

掴んだところまでは良かった。その後、口に運ぶ途中に、手が滑ってしまったのだ。落下するトマトに、持ち前の運動神経で手を伸ばす。キャッチは、出来た。問題はその後だ。

椅子に座ったままペンを拾ったあと、バランスを崩して壁に、そのペンを持った手をつくというのはよくあることだと思う。



ただし、俺の場合、拾ったのはトマトで、そのトマトを持った手についてしまったのが休憩に入るためにたまたま通りがかった、店長だったのが、決定的な間違いだった。

「あ……」

店長が漏らした声に、裏部屋の空気が、固まったように感じた。白いコックコートをまるで鮮血のように染めている潰れたトマト。

もう十分にダメージをくらったのに、本当に心が折れそうになったのはその後だった。

「……あー、店長、ごめんなさい、本当にごめんなさい、謝ります……その、本当に、心から、謝りますんで、そのクリエイティブなドッキリやめて頂けませんか?!」

人間、パニックになるとつらつらと言葉が出てくるもんだ。洗いますと言ったが断られ、奥のお手洗いに引っ込んだ店長に罪悪感で耐えられなくなつて、再び声を掛けに来ただけだから、店長には、今すぐ、やめて欲しい。トマトが肌のめり込んでいるという冗談を！

「ああ、見ちゃった?」

慌てるような様子もなく、眉を下げながら、その骨ばった手で後ろに流している髪を掻く。

「見ちゃった、じゃないすよ、何ですか?!」

平然とする店長に対し、滅茶苦茶動揺する俺。それはそうだ。どうしてトマトが肌にめり込んでいる成人男性に驚かないだろうか！

慌てる俺に、コックコートを脱いだままの店長は困ったような顔をした。

「んん、説明してもいいけど、信じるかい?」

「……何ですか。」

「ほら、二八年前、大昔の、なんかの大予言が騒ぎになったらろう? 君は生まれてないけど、話には聞いたことがあるんじゃないかな。その年に星たちが一瞬にして消え、人類も滅びてしまっ、みたいな。」

「あつたつて聞きますけど……世界は滅びてませんよ、あれ嘘でしょう。」

それとこれが何の関係があるのか、と俺は訝しげに店長を見る。予言は本当だよ、と店長が微笑んだ。



「僕が世界を救ったんだ。」

裏部屋の時間が、止まった。

「待て、いや、なんすかあんた、その嘘！」

「こら、『あんた』呼びは禁止。あと、世界を救ったのは、嘘じゃないよ。」
俺が店長のことを「あんた」と呼んでしまうのをいつもと変わらず注意し、笑う店長。

店長はまるで兄貴のように、俺に勉強を教えてくれたり、構ってくれたりするので、俺はつい敬語が抜けてしまうことがある。それを注意してくれるのもまた、今度は父親のような店長なのだ。だから今の店長の俺に対する反応は至極しごくいつも通りで、状況がおかしさこのアンバランスに俺はますます混乱した。

「君は、今の世界が、この現実現実に生まれた最初の世界だと思ukai?」

「……勿論もちろんそうでしょう。宇宙が一二八億年前に誕生して、地球が四六億年前、人類が大体四〇〇万年前。学校で習いましたもん。」
指を折りながら答える俺に、店長が笑う。

「それは、二回目の話だ。」

はあ?! と思わず素っ頓狂とんきやうな声を上げた。

「二回目の人類は、二回目の人類と大体同じ道を辿たどっていたんだ。でも、丁度二八年前にあった予言のようなものがその時もあった……誰も、そう、例えば君たちが神様とよぶような存在さえも対策を講じていなかったから、予言通り、星は消え、人類も滅びたんだ。」

だから僕は、と自分の胸に手を当てる。

「そういう存在に、二回目の宇宙の星が消える瞬間星になって今までと変わらぬ宇宙を続けさせろ、救ってやれって感じて作られた。」

説明に全く頭が追いつかない。

「……じゃあ店長、自分が無敵のヒーローとでも?」

「んー、むしろ身を呈ていして世界を守るヒーローかな。命を削って世界を救う。星を産むし、最終的には全部、星になって完全消滅する。」

「ええ……じゃあなんで世界は救われているのにここに居るんすか? とうか、そのびっくりトマトと何の関係があるんですか?!」

「世界が救われてるのに俺が居るのは、そう、俺にとっても謎なんだ。」



店長が、目を伏せる。

「でも、トマトは……うーん、星を産んだから、中が文字通り空っぽなんだよね。それで、星なんていう大きな質量のものが入っていたのだから、よく分からないけれど、中の密度だとか、そんなのが大きいのだろう。だから、入ってこようとしてるんじゃないかなあ。」

そう言っつて、胸筋と腹筋の間に埋まっているトマトを撫でる。かつては俺の家の安アパートですくすくと育っていたトマトを。全く違う未知のものに見えて、俺は目眩を覚えた。

「え、星を……産んだ？ 意味分かんないですよ……大体、星を産むって、何ですか？ そんな、信じられないですよ。俺、天文学やろうとしてるんですよ。天からの便りを受け取る、って仕事。今までその便りは絶えたことがないんです。空にはいつも同じ星が光り続けているし、あんたはただの人間だ。非科学的ですよ。俺から見たらあんたはただの、何故かトマトが体に溶け込む人なんです。」

呻いて、両手を顔で抑える。申し訳なさそうに、店長がこちらの様子を伺っているのが分かった。肌にとマトをめり込ませたまま。

「……取り敢えず、トマト、俺の腹に入れてみる？」
「何だよー！」

「……いや、なんか抜くの怖いし……あと真珠のようなものが作れそうな気がして。」

「何言ってるのあんた。」
指の隙間から恐る恐るトマトを見る。トマトは相変わらず、じりじりとした赤い肌で、お手洗いの薄暗い蛍光灯の光を反射していた。

「ほら。」
「ええ、無理、無理です、そんな人の体にめり込んだ野菜を触る趣味ないんで！」

俺の手首を掴んでトマトを押し込ませようとする店長に必死で抵抗する。店長はいつにないほど楽しそうだ。

店長の力は強くて、あと、声を出した瞬間、俺の指がトマトを押しした。

「っああ、入っ、入っつていく、い、痛くないすか?！」

「いやあ、星なんて大きな物を産んでるんだから別にこれくらい……」



「……いうのってね、見てる方が怖いんですよ！」

トマトは、まるで店長の肌が片栗粉を水で固めたものでもあるかのよう
に、ずぶずぶと沈んでいった。

肌にめり込んでいるトマトという現実感のない光景が無くなると、少し冷
静さを取り戻してきた。店長が笑いながら俺の腕を離す。

「賑やかな奴だなあ。」

「そ、そりゃあ賑やかにもなりますよ！ あんたの肌の主成分何なんです
か！」

「敢えて言うなら星屑？」

「もー……全然信じらんない……」

とにかく、と俺は目頭を押さえた。

「……これ、他に知っている人は？」

店長が首を振る。

「勿論、君だけだ。」

「絶対他の人に野菜の消化吸収を肌から出来るってこと言っちゃ駄目です
よ。捕まえられて研究されちゃうかもしれないですからね。」

「いや、これ野菜を消化吸収してるわけじゃなくて……」

「俺からしたらそれが真実なんです。」

拗ねたように言う。でも、店長がこんな嘘を吐くだろうか。トマトが消
えたのも、二八年前になんとかの大予言があったのも真実だ。

そこで、ふと、思い当たることがあった。

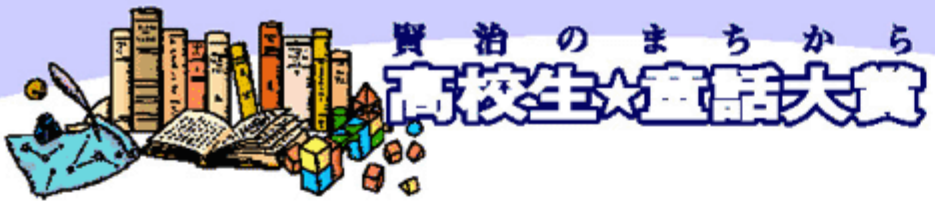
「……二八年前って、〆月〆が消えた年か。」

「……え？」

後ろを向いてコックコートを着直していた店長の動きが、止まる。

「……ああ、いや、〆月〆って星、知ってます？ それが無いんですよ、二
八年前から。で、俺はその原因を探りたいから、空に関心が払われないこの
ご時世に、天文学をやるうと思ってる……あ、もしかしてこれが店長の疑問へ
の答えじゃないですか？ 星を産んで世界を部分的に救ったけど、月は産ま
なかったから店長はまだここに……とか、」

冗談ですけどね、と続けようとして、振り返った店長の表情を見て、やめ
た。というより、言葉が出てこなかった。



「そうか……そうだ。」

店長は、喜びだか、困惑だかよくわからない、感情をこった混ぜにしたような、今までに見たことのないような表情を浮かべていた。

「そういえばそうだった、やっぱり、余りが出るだなんておかしいと思ったんだ。」

その目は、俺の方を見ていなかった。

「そうか、世界が違うから、ある一つの星が無くても、違和感がないような心の作用が……生まれたのか。確かに、星や空は、日常に関係ない……この少年以外の天文学者までもが気につけないのは、どういう理由かはわからないけれど……」

「……店長？」

俺は不安になって、呼びかける。

天からの便りは絶えたことがない、と言ったままにしておけばよかった。

「月」よりも星座。「月」なんて、空に関心を払わない世間の中でごく稀まれにいる星を見る人たちでさえ誰も注目していないような星だから、店長がこんなに反応するだなんて思っていたいなかった。

「まさか完全消滅するだとか……嘘みたいなこと、言わないですよね？ 店長はずっと、この料亭の店長ですよね？」

店長は返事をせず、眉を下げて微笑んだ。

俺はそれに、言いようのない不安を感じたのだった。

昼の太陽がない分、蛍光灯があっても少し暗い裏部屋。俺は店長に促されて、テーブルをはさんだ向かいに腰かける。

「いつも午前か夕方のシフトの俺を夜に呼ぶなんて、何かあったんですか？」

その言葉に、ああ、と店長が頷うなづき、いたずらっぽく笑った。コックパンのポケットをぐそぐそといじって、

何かをテーブルの上に置く。質量が大きいらしく、鈍い音がした。

……見覚えのある、数日前のトマトだった。

「待って下さい、これびびびいじりごとですか?! 何ですか?!」

「トマトだよ。」



「それは見れば分かります！」

動揺する俺を、店長が楽しそうに見る。

「真珠のようなものが作れそうな気がすると言っていたらどう？ ……出来たんだよ。」

くす、と店長が笑って、俺の手首を掴んだ。手のひらの上に、トマトをべっと押し付けられる。それはトマト本来の重さではなく、ずっしりと重かった。

「そう言わないで、受け取っておくれよ。君への贈り物だ。」

「え、つまりあんたの体内から出てきたってことでしょ?! グロテスクですよー!」

トマトを返そうとすると、先程までのふざけた感じを引っ込めて、店長が俺の目を見る。

「……いいから。きつと、お前の道しるべになるって願いを込めたんだ。」

ぽんぽん、と俺の手のひらの上のトマトを軽く叩たたいて、俺の腕を放す店長。これで店長にトマトをつき返すことが出来るようになったはずなのに、俺は何故かそう出来なかった。

「意味わかんないですよ……!」

そう言っいて、肘ひじを曲げてトマトを見る。表面は、何も変わらないように見えるが。

店長が立ち上がって、テーブルの横の窓のカーテンを開けたらしい。じゃつ、という音に、俺はトマトを握った手をテーブルの上に置き、そちらを向く。ライトにかけた真っ黒な布に、針で小さな穴をいくつも開けたような夜空が現れる。星々が、今日は特に綺麗きれいだ。

「窓の外に、夜空が広がっているだろう?」

微笑む店長に、俺は何か不安感を覚えた。首をかしげながらも頷く。

「しっかり見ておくんだよ……未来では珍しくなる、〴〵がいない最後の空だ。」

ぞくり、と背筋が冷たくなるのを感じた。

「……いや、待って……!」

「今日は晴れ、……僕が〴〵になるために空に昇るのに、絶好の夜だ。」
「待って下さいよー!」



賢治のまちから 高校生☆電話大賞

俺は思わず立ち上がる。

「……いやいや、信じられないですよ。何、それって消えるってこと？ 一人なんて、そんな簡単に消えられないですよ。あんたを知っている人は行方不明届とか出すだろうし、この店もどうするんですか？ 大体……」

言葉に詰まる俺を、店長は微笑みを浮かべて見ていた。それに俺は、泣きそうになる。

「うん、だから、みんなの記憶には残らないんだ。お店も気付かないうちに店長が変わっていたということと落ち着くはずだ。僕が居た証拠は何も残らないよ。」

「……じゃあ、俺の記憶も、なくなるってことですか？」

悲痛な声を出す俺に、店長が目を細める。

「そう、そのはずだ……けど、僕の「工」を押し付けても良いかい？」

「……何？」

店長が、真っ直ぐに俺のことを見つめる。

「……君にだけ、記憶を残したい。確かに僕が居たというその記憶を。そして、月を見て思い出して欲しい。」

「……そんなの、」

喉が詰まって、視界が滲にじんでくる。俺は滅多に泣かないのに。消えるだなんだという言葉よりも、こういう言葉の方が胸に刺さる。この人は、本当に消えてしまうのだ。

滲む視界の中、下を向いて黙って頷いた。

「……ああ、ごめんね。空を見ない世界の中で、僕は君と出会えて本当に良かったよ。……君はまるで、家族のようだった。」

そう言って店長が、涙を零こぼす俺の耳をそっと手で包んだ。視覚も聴覚も働かなくなつて、闇に溶けていく感覚を覚える。

「おやすみ。」

そのままテーブルに突っ伏し、泣き疲れて寝てしまったようだ。気付いたら夜中だった。

手には、あの「トマト」。



窓から差ししているのは、二八年前になくなってしまったという、俺が見たことのない淡い光。いつの間にか蛍光灯が消えていた部屋の中は、昼にできる影とはまた違う、不思議な青い影と白い光の粒子で満たされている。

店長は、もう居ない。

それを察して、目頭が熱くなる。トマトを持ったまま、ふら、と立ち上がり、従業員の名前やシフトが書かれているホワイトボードを見る。店長の名前があるはずの欄に俺が知っている名前はなかった。あの人は本当に、俺の記憶だけを残して消えてしまったんだ。

「意味、分かんねえ……こんなん、拷問じゃんかよ……」

ボードを背にしてへたり込む。ボードと相対する位置に窓があるので、夜空がはっきりと見えた。窓が切り取る夜空の右上には、今まで写真集でしか見たことなかった丸い「月」。自身が光っているだけでなく、周りに光のベールを纏まとっているようだ。あれが、「満月」というものなのだろう。

「満月」のときは、夜空が明るくて星が見えにくいというのをどこかで読んだ。だからだろうか、いつもより星が少なく感じる。

右肘を立てた右膝の上に置き、目線の先にトマトを位置する。相変わらず、ずっしりと重かった。ただの野菜であった時には感じなかった、硬さ。でも、無機質な硬さではなく、どこか温かみを感じるような不思議な硬さだ。

真珠。

俺は小さく呟ささやいた。何となく、左手の親指と人差し指で爪弾つまびいてみる。

きん——

そう、鈴のような、軽やかな透明感のある音が鳴る。俺はまた、トマトを爪弾く。馬鹿みたいに、何度も、何度も。

きん、きん、きん——

ふと窓の外を見ると、その音に合わせて白い筋が夜空を切り裂さいていた。この都会で見えるにはありえないほどたくさん流れ星だ。

俺は大きく目を見開く。このトマトの形をした、真珠は。

おもむろに、トマトの中心に両親指をかける。硬質な音からは想像も出来ないように、その表面はゆっくりと裂けた。



まず認識したのは、その黒さ。続いて、その輝き。トマトの中には、まるでぞくろの様に沢山の漆黒の結晶しゅうけいのようなものが詰まっっていて、それらはきらきらと輝いていた。

窓の外を見ると、黒に限りなく近い、深い青の夜空の中に、真っ黒な筋。……ちようど、誰かが切り裂いたかのような。

俺は呻うめき声を上げて、頭を抱えた。

「やっぱり割っちゃだめなやつだよなあ〜」

裏部屋に間抜けな声が響く。

このトマトは、真珠で、宇宙だ。

何だそれ、意味分かんねえ。どうして俺に預けたんだ。

「ごんな、一つの可能性にたどり着いてもなお割っちゃうような奴に預けんなよ……」

小さく、ぼやく。避け目を親指の腹で撫なでると、嘘のように裂け目はなくなつた。俺はもう驚かなくなつて、

ただ小さなため息を吐く。窓の方を見上げて、恨めしげに月を見た。夜空の裂け目もすっかりなくなっている。

「宇宙とか、大事なもの……何これ、店長の形見にでも、天文学をやる励みにでもしろってこと？ 笑えねえっすよ。」

きん、と八つ当たりのようにまたトマトを爪弾いた。夜空には相変わらず、馬鹿みたいに綺麗な「月」があつた。

「……あなたは俺の兄貴で、父親でした。」

体操座りの姿勢で両肘を膝の上に置き、うつむく。目を閉じ、祈るようにトマトを両手で包みこんだ。頬を、一筋の涙が伝っていくのを感じた。